

凍てつく翼の報告記

VerT—EX

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目を覚ましたらやたらめったらフレンドリーな祖龍から、『ちよつと君達の魂混ざっちゃったゴメイン☆(意識)』と言われ、なんだかんだでモンスターハンター世界の(一応)人間に転生した、前世現実世界の人間兼前世イヴェルカーナの主人公。

ぶっちゃけ盛り込みすぎではないとも、祖龍に頼まれた「世界を見て回って定期的に報告する」ことをこなすためにも、ゆっくりと世界を回り、巡り、出会おう話。

Q. お前いつも小説量産してんな

A. しゅみです よろしくおねがいます

今回は読者参加型です。ええ、色々影響受けてますよ、ええ。認めます。
キャラクター募集はこちら

[<https://syosetu.org/?mode=kappa|view&kid=263061&uid=242786>]

目次

プロローグ	1
一枚目：ゆきがみさまと旅立ち	10
二枚目：雪の森	19
三枚目：寒空の街	26
四枚目：雪原を進む	33
五枚目：零下の白騎士	40
六枚目：立つ鳥達の村	48

プロローグ

真つ白な空間。『彼』の意識が再び浮上したのは、そんな場所だった。

(ここは、どこだ？自分は……)

見渡す限りの白。違和感があるが違和感のない四足歩行の体を起こすと、もう一度周囲を見た。

すると、白の中に浮く『白』が視界に入った。

四つ角を持った、純白のドラゴン。知らないが識っているという感覚に、軽い混乱を引き起こす。

(あれは……ミラ……いや、自分は、あんなの初めて見るのに、なんでわかるんだ……?)

『彼』がそう混乱していると、純白のドラゴン——ミラルーツが振り向いた。

そして、神々しく威厳に満ちた姿で、口を開いた。

『あ、おはよー』

(?!)

あまりにも気さくすぎるその一言に、『彼』は更に混乱を加速させた。

『わー！?!落ち着いてー?!』

『落ち着いた？』

コクリと頷く。ミラルートツが羽毛でわさわさとしたおかげで落ち着いた様子だ。もふもふは正義。

『それは良かった。早速質問だけど……ぼくが何者かは知ってる？』

頷くような首を振るような微妙な動作。

（識っているが、知らない。ミラルートツというモンスターはよく識っているが、この存在が何なのかは知らない……）

『あー、やっぱりかあ。うむむむ……』

（それよりも、自分が誰でどうしてここにいるのかが知りたいな……）

『そう？うん……そう言うなら。教えよう』

ミラルートツは苦笑い（のつもり）をすると、どこか気まずそうに話し始める。

『まずは、謝罪からだ。申し訳ないが、こちら側の不手際によって「混ざって」しまった』（混ざる？）

『彼』は首を傾げる。状況が分からない、と言った様子だ。

『見てもらったほうが早いかな』

(……!?)

ミラルーツは「よっこいしょ」と、何やら大きな鏡を取り出してくる。

そこに映る『彼』の姿は、凍てついた龍の姿だった。

白を基調とした甲殻に包まれ、体色の一部は濃紺に染まっている。冠のよな突起を備え、大きな翼は巨大な雪の結晶のよう。長い尾は先端が鋭く、細くしなやかだ。

” 冰龍” イヴェルカーナ——冷気を操りすべてを凍てつかせる、氷の古龍。周囲を銀世界に変える、銀盤の貴人。

その龍が、大きな鏡に映っていた。『彼』が混乱しつつ前脚を動かせば、鏡の中の冰龍も同じように前脚を動かす。

(イヴェルカーナ?! いや、自分は人間の……あれ? もとから? あれ……?)

『落ちていて。こちら側のミスなんだ。人間のキミと、冰龍のキミ。死んだキミ達の魂を転生させようとしたら、混ぜってしまったんだ。死んだときのこと、覚えてる?』

(死んだ? 確か、自分は……あの狩人に……車に……あれ、二つある?)

『やっぱりかあ……変に混ぜっちゃってる、か。名前も思い出せないでしょ?』

考えてみて、「確かに」と『彼』は頷く。名前が全く思い出せない代わりに、思い出せるのはモンスターや世界についての知識だ。

一周して段々冷静になってきたのか、『彼』は混乱しなくなってきていた。

『私がやってるわけじゃないけども、様々な世界で死した魂は、一度集約されてから、また様々な世界に生を受ける。その時記憶はリセットされるんだけど、たまに残っちゃうのがあるんだ。そういうのが転生ものみたいな感じで、前世の記憶を引き継ぐんだ』

(ふむ)

『だけど今回ね、ちよつとした手違いで君たちの魂が混ざっちゃって、応急処置としてここに来てもらったんだ。わざと混ぜた事例もあるけど、今回は想定外だからね』

ミラルートツは、いつかの者達を思い出す。が、そんな場合ではないと思って気を取り直す。

(そこまでは分かった。しかし、それなら説明してそのまま転生させればいいのではないだろうか)

『そうなんだけどね、これを利用しない手はないってことになったんだ』
(?)

『こつちのミスでこうなって申し訳ないけど、頼みがあるんだ。特殊な状態になるけど転生させるから、定期的に感じたことをどんな形でもいいから送ってくれないかな』

ミラルートツからの説明を聞きながら、頑張つて『彼』はかみ砕いて整理してみる。

ミラルートツが言うには、彼(彼女?)の管轄は『モンスターハンターの世界』になる

らしい。そこに転生させるから、世界を見て色々定期報告してほしいのだと。

ちなみに、実際にそういう頼みをしている人物は何人か今いるようだ。

で、なぜ定期報告してほしいのかだが、ミラルーツは世界を見ておきたいのだが、易々と動くわけにはいかない。だから、前世の記憶に龍を持つ数名に頼んでいるのだそうだ。

その一人に、『彼』も加わってもらえないかということだ。

「特殊な状態」がよくわからないが……。

『……頼める?』

(……拒否する意味はあんまりない。なにより、目の前にいるのはかの“祖龍”だ。二重の意味で、逆らいたくない)

『彼』は同意の意味で頷く。

『ああ、ありがとう!これでドヤサレナクテスム……』

(?)

『あ、こつちの話。じゃあ、転生させるから——』

▼▼▼

「……あー、頭痛い」

変な夢を見て目が覚めて、俺は体を起こす。打ち付けたのか、頭が痛い。案の定、頭

には包帯がまかれている。

俺の名前は、ヴェルカ・ヒョーリユ。現在16歳。夢の中で『彼』と言われていた輩だ。

いわゆる転生者。ただし、あの”祖龍”ミラボレアスの言った通り、人間と”氷龍”イヴェルカーナが混ざった、特殊なタイプの転生者だ。

まあ、モンハンの世界への転生は妄想しまくっていたのでそれはいい。

白っぽい水色の髪に、紺色の目。背は平均より少し高いくらいで、若干やせ型。種族は一応人間族。友人に竜人はいるけど。

「にや、起きたニヤ?どんな感じニヤ?」

「頭が痛い……血出てる?」

「止血はしたにや」

「出てたかあ」

看病をしていてくれたフルフル装備のアイルーが、テーブルの上の血だらけの包帯を指さす。よく死ななかつたな、というのが一番に出た感想だ。

「しかし、びっくりしたニヤ。クシャルダオラに遭遇して崖から落ちたって聞いた時は、

嘘かと思ったニヤ」

「あはは……まさか噂に聞く古龍がほんとうに居るとは思わなかったからね。頭から血を流すだけで良かったよ」

「本当ニヤー！」

アイルーの言う通り、俺の怪我の間接的な原因は、鋼龍、クシャルダオラだ。

この村——ウユリ村は、海岸に面するが豪雪地帯。少々特殊な気候だが、冬も一応他の村や街への交通手段はある。

その手段というのが村の東の山の洞窟だが、俺が怪我したのはそこじゃない。

北側にある山へと雪山草を探しに行っていたら、クシャルダオラに遭遇し、その龍風圧で崖から落とされたのだ。

気絶してしまっていたが、幸いにも雪に落ちたためか怪我は頭の流血だけで済み、たまたま近くを散歩していた村人に発見されたので、今ここにいます。

「まあ、もう少し大人しくしとくのニヤ。出発は4日後ニヤんだし、ヴェルカは傷の治りも早い体質だし、そうすれば問題なく出られるはずなのニヤ」

「それもそうだな。ありがとう」

「?!」

とりあえず暇だし、村を散歩しようかなあ……と思った瞬間、外から大きな音が聞こえた。

何事かと思い、つつい窓を飛び越えて外に飛び出してしまった。

一枚目：ゆきがみさまと旅立ち

——むかしむかし、とてもとてもとおくの雪山から、傷だらけのゆきがみさまがやってきました。

むらの人々は、とてもびっくり。おおきくてまつしろなゆきがみさまが、傷だらけでやってきたからです。

むらの人々は、がんばってゆきがみさまを看病しました。ゆきがみさまは無事にげんきになり、おれいに「こどもたちとともに、この地をまもりましょう」といいました。

それから、そのむらはゆきがみさまとこのこどもたちとともに、たすけあつてくらすことになりました。——

ウユリ村の童話『ゆきがみさま』（一部省略)

◇◇◇◇

物音に飛び出すと、運んでいたであろう壺を割ってオロオロしている少年がいた。別にモンスターとかじゃないのか、よかった。

「おーい、大丈夫か？」

「あ、ヴェルカにーちゃん！え、えっと、たまた助けて！」

「あ、おつまー！」

少年は俺の後ろに隠れた。どーしたもんだと思つて割れた壺を見てみれば、その中からハチミツがこぼれている。

あーなるほど、と理解する。すると案の定、怒った様子の竜人の青年がやってきた。

「どこ行つた！……つてああ、ヴェルカ。その後ろに隠してる小僧をな」

「ネーギルガ、まずは状況を聞きたいんだが」

ネーギルガ・ジールメーツ。だいたい同じ年の、竜人族の新人ハンター。俺の幼馴染だ。少々喧嘩っ早いのが、悪い奴じゃない。

ちなみに、この村のギルド支部では仮登録までしかできないため、本登録のためにも四日後に共に街まで旅立つ予定だ。

「その小僧がな、俺のどつておきの甘味を盗んだんだ！」

「マッ？」

「マ、だ。だから、引き渡せ」

少年を見れば、震えながら助けを求める目で見てきた。

しよーがない、庇うだけ庇うか。

「まあまあ、反省してるみたいだし、まずは落ち着け」

「落ち着いていられるか！とっておきが割れたんだぞ?!」

「ほら、新鮮なやつの方が美味いだろ？新しいのが取りに行ける機会になったじゃないか」

「それはそうだが、うむむ、美味しいハチミツ……」

ネーギルガは考え込む様子を見せる。それから、かんがえついたので。

「チツ……分かった。出発日に少しより道だ。……ただ、小僧。村長に叱ってもらおうかな？それで許す」

「そ、村長?!」

「なんだ？氷牙竜のほうがいいか？」

「う……ごめんなさい……ありがとう……」

おずおずと少年は前に出て頭を下げる。

ネーギルガも落ち着いたのか、ため息をついて「とりあえず片付けろ」と言った。

そう言われて、少年はとてとてと道具を採りに家に向かって言った。

「つつたく……で、改めてだが起きたのか」

「ん？まあな。すぐ治るから心配すんなよ」

「そこは心配してない。それで、やっぱりハンターにはならないのか？」

ネーギルガはよく、「ハンターにならないかと」聞いてくる。どこぞの上から3だか4番目の鬼か?!とかちよつと思つたこともあるが、心の底から色々考えてくれているので違ふ。

ならないと言いつつ続けて早5年、初めはキレられたものの今では割とわかつてくれるらしい。半分冗談のように言ってくる。

「言つた通りだ。ギルドつて縛りがあるとできないことも多いからさ」

「そうか……突然なりたくなつたら言えよ。俺はいつでも歓迎するぞ」

「それはありがたいな」

そう会話しているうちに少年が戻ってきたので、共に割れた壺を片付け始めた。



——そして、四日後。

村の人々から大規模に送り出され、俺とネーギルガは村を出ようとしていた。

「じゃ、行くか」

「ハチミツのために寄り道するからな」

「はいはい」

そう話していこうとすると、村長が一步前に来て言う。

「頑張ってくるのじゃぞ。ゆきがみさまへの挨拶も忘れずにの」

「わかってるよ、村長」

「ああ、ちゃんと挨拶はしていく」

「うむ。たまには帰ってくるのじゃぞ」

その言葉を聞いて、俺たちは出発する。

「ゆきがみさま」は、ウユリ村に伝わる守り神のことだ。

遙か昔に何かあったようで、ここら一体のポポと共に、代々外来の大型モンスター……例えば、”轟竜” ティガレックスとか、”獄狼竜” ジンオウガ亜種とかから守ってくれている。

そして、村の外に行くときと返ってくるときは、洞窟に入る前に「ゆきがみさま」に挨拶していくことが掟のようになっていた。

一応、昔、育ての親に連れられて「ゆきがみさま」に会ったことがあるが、なかなかのド迫力だった。同時に、優しさも感じ取れた。

「ヴェルカ、この時期ならどのあたりが一番ハチミツが採れる？」

「今の時期なら……」「ゆきがみさま」のこの近くだな」

「じゃ、先に挨拶していくか」

雪山に登る。雪山だが、あまり険しくはない。もう片方の雪山はなかなか険しい。まあ、あつちはいまクシヤルダオラが住み着いてるっばいし、用はないし……。

ハチミツやら小型モンスターやらの出現に関してはネーギルガも詳しいはずなのが、昔から、2人で行動するときは俺が情報でネーギルガが体力で、みたいな感じなのでその癖だ。

ポポの親子を横目に、登山道に行く。もふもふのポポの子供はやっぱりかわいい。ふわふわしている。

しばらく進むと、頂上……ではないが、開けた場所に出る。

そこには、「ゆきがみさま」とその子供、何匹かのポポがいた。

「おー。相変わらず「ゆきがみさま」は大きいよな」

「ネーギルガは何回か外出てるから多く会ってるのか」

「まあな。……ってことで、「ゆきがみさま」、俺達村の外でちよつと頑張ってくるわ」

「ゆきがみさま」は、『パオオオオオオン』と答える。なるほど、「いつてらっしやい」

ということか。

「おおつ、音圧……」

「体が大きいし、「ゆきがみさま」の種族自体デカいからね」

「子供はポポみたいなのにな」

真つ白で大きく、像のような姿の「ゆきがみさま」——”銀嶺”ガムートが、優しげな眼差しで見つめてくる。

この”銀嶺”は、どういいうわけか代々この辺りを護っている。理由を直接聞こうと思つたことはあるが、ここまで来るのはなんとなく面倒なので聞いたことはない。

「……あ、そうだ、「ゆきがみさま」。この近くのハチミツ、採つていいです?」

そういや近くのハチミツを採るし、一応聞いといたほうがいいだろう。

すると「ゆきがみさま」は、静かに目を閉じ、その長い鼻で一点を指す。

そこを見れば、大きな蜂の巣がひとつ。なるほど。

「あれを持ってけつてさ」

「本当か?! 「ゆきがみさま」、感謝するぞ!」

嬉々とした様子で、ネーギルガはハチミツを採るべく蜂の巣に駆け寄る。

その間に、なんとなく「ゆきがみさま」を観察してみる。

ガムートの老いた個体である”銀嶺”の特徴である、白銀の毛並みがきれいだ。あ

と、めちやくちやデカイ。確か、たまーに村から見えるときもあつたっけな。

傷はあるものの、それはいつぞや”轟竜”ティガレックスを撃退してくれた時のものだろう。

…基本的には、この辺りに住むモンスターは穏やかな個体が多い。

また、中・大型モンスターもガムート以外にはウルクススがいるくらいだ。

海に目を向ければ違うだろうが、どういわけかギアノスやらブランゴやらとかも生息してないので、かなり平和だ。クシャルダオラが飛来して来てる？あれは例外だ。

あ、いや、確か洞窟にフルフルがいたっけ。たまにケルビ食ってるだけののんきな奴だ。別に害はない。

まあそういうわけで、稀に外からとんでもねーのが来る以外は平和な地域なのだ。おそらく「ゆきがみさま」こと”銀嶺”ガムートのおかげだろう。

何故ポポだけでなくウユリ村も守っているのかは分からないが、間違いなく特別穏やかな個体だろう。

「ヴェルカ、待たせたな」

「おつ。いいの採れたか？」

「最高だ。それじゃあ、「ゆきがみさま」、行ってくる！」

そう言い、「ゆきがみさま」が見送る中、俺達は洞窟へと向かう。

——この辺りは「ゆきがみさま」のおかげで平和だが、一步洞窟を抜ければ「ゆきがみさま」の威容は届かない。

魑魅魍魎跋扈する……とは言わないが、それでもやはり、様々なモンスターがいるため危険だ。

だが、きつとこの先危険なことはいくらでもあるだろう。気にするほどではない。それよりも、この先に出会う人々や起こることに對してのワクワクが強い。

俺達はギルドのある街——ユアンシキリへ向けて進みだした。

……あ、そういや報告の手紙も書くのを忘れないようにしないとな。

二枚目・雪の森

「でええええい!!」

巨獣剣が一閃。傷を負い、「これはまずい」と判断したのか、ギアノス達は一目散に逃げていく。

「ふう、こんなものか」

「ああ、全部逃げて行ってみたんだ」

「つつたく、面倒かけやがって……」

ネーギルガは巨獣剣を納刀すると、ため息をついた。

洞窟を抜けた俺達は、ユアンシキリの街を目指して雪の森を歩いていた。村から街まで、だいたい平均4日。今は4日目、街までもう少し……のはずなのだが、先ほどからやたらとギアノスの群れに絡まれていた。多分今追い払ったこれで、ひと段落だろうが。

「あとのどのくらいだ?」

「もう1時間ほどまっすぐ行けば見えてくるはずだけど……」

雪の上の足跡は、ギアノス以外には特に見当たらない。ヒトもそうそう通らない道だ。迷わないように気を付けなきやな。

……というフラグを建ててしまったのがいけなかったのだろう。

「……………どこだ？」

「えーつと……………どこ？」

そう、俺達は盛大に迷っていた！どこなのここ!!!

まだ森の中で一応開けた場所なのだが、わからん。そもそも開けた場所に出るのは森を抜けた時だけのはずだ。

「えっ、そのはずだよな？」

「言いたいことはわかるし、俺の記憶ならその通りだ。だが、ここは知らんな……………どこだ
わかん」

わからん、さっぱりわからん。俺よりも通ったことのあるはずのネーギルガも分からない様子だ。

空を飛んで見たいところだが、人間では翼がない。手段はあるにはあるが、そういうのは緊急用だし……………。

ああ、木を全部氷漬けにして砕いたら早いんだろうな……やらないけど。

まあそれはそれとして、今考えるべきはどうやって迷子から脱出するかだ。

「えーっと、いまギリギリ見えてる太陽があっちで……」

「年輪的にもこつちが北だな。ちよつと木に登って見てくるか」

「頼んだ」

ネーギルガがもこもこしたガムート装備にもかかわらず、身軽に木に登る。村のあ
る、つまり「ゆきがみさま」の山の位置を確認するためだ。

少しして戻ってくる。

「あつちが山だな。だったらユアンシキリの街は……」

「だいたい……あつち側だ！」

「行くか！」

なんとかかなりそうだ。時間はかかりそうだが、とにかく進むう。



森の先に、街の影が少し見えた。よかった、間違っていなかったようだ。

「もう少しだな」

「それじゃ、陽も傾いてきたし、急ぎ——うっ?!」

背中に衝撃。なにか投擲物が当たったのだ。ガムートの毛で織られたコートでよかった。でも痛いものは痛いし、なんとなく痺れる。

前に倒れたが、すぐに立ち上がる。

「ちい、何だ?!」

ネーギルガが巨獣剣を抜刀し、周囲を警戒する。

俺も同じく周囲を警戒する。簡易的なライトボウガンもどきに装填する。通常弾だけ。

森の奥の方から、ゆっくり歩みを進めてくる大きな黒い影。

狼のようなシルエット——ジンオウガ亜種が、現れた。

”獄狼竜?!”

「た、確かに何度か「ゆきがみさま」の山に来ていたからいてもおかしくないけど……!」

おかしくないけど、こんな人里近くまで来るのか?!というか、いつの間にこんな近くまで来てたんだ?!

「流石に俺の実力では相手にできんぞ……だが、このまま逃げるのも至難……!」

「なんとかして追い払うしかないけど、ジンオウガ亜種はえーっと」

全力で脳内の知識を探る。

確か弱点は雷と水で、こっちの攻撃手段は通りが微妙な氷のみ。龍光を纏っているの
で通るには通るが、だとしてもどうしろって言うんだ

おそらく俺がぶつかつたのは『蝕龍蟲弾』だ。

昔の性質を若干受け継ぐだのなんだのあの真つ白トカゲは言っていたが、本当にそう
なのか、龍属性エネルギーでちよつと痺れてる。麻痺して動けないって程ではないの
で、よく生きてるな俺。

幸い、ガムート素材の装備には龍耐性がある。属性的な面での防御はまあ大丈夫だ。
ぶつちやけ問題は、その凶悪すぎる物理攻撃力と、機動力だ。一時的でもいいので、何
かしら妨害できればいいのだが……

とか考えているうちに、ジンオウガ亜種がいわゆる「お手」を繰り出してくる。

ネーギルガが前に躍り出て、その盾で受け止める。

「オラッ！」

そのまま盾の後ろから、巨獣剣を振るう。が、硬い甲殻に阻まれて弾かれる。

それでも衝撃は来たのか、ジンオウガ亜種は一度飛び退く。

「やっぱり硬いな……」

「無理はするなよ」

「分かっている。が……っ！」

ジンオウガ亜種の攻撃を盾で受けつつ、回避も織り交ぜている。無論、俺も狙われるがそれは紙一重でだが回避できている。

このままではジリ貧だ。おそらく、ジンオウガ亜種が諦めるより俺達がぶっ倒れるほうが先になる。どうすれば……

「——目を瞑りなさい！」

女性の声。反射的に目を瞑ると、瞼で閉ざされていても分かるほどの強烈な光が周囲を覆う。

おそらくは、閃光玉。

光がおさまるや否や目を開ければ、目がくらんだのかジンオウガ亜種はあらぬ方向へと攻撃を繰り出していた。

「こっち。いいから、早く！」

再度、声。その方向を見れば、ミディアムボブの金髪を持った、マフモフ装備の女性ハンターがいた。

どうしよう、と一瞬悩んでネーギルガと顔を見合わせると、真っ直ぐに女性ハンターの方へと走った。

三枚目・寒空の街

「着いたわ。ユアンシキリよ」

「ありがとうございます」「感謝する……ます」

金髪の女性に連れられて、なんとかユアンシキリの街へとたどり着くことができた。

ユアンシキリの街はウリ村やポケ村ほどではないが雪が積もっており、寒冷地向いた装備……例えばウルク装備とか、ザボア装備とか……そういう着こんだ装備のハンターが目につく。

この女性ハンターもそうだ。この人のおかげで、なんとかジンオウガ亜種から逃げきれたのだ。



時はさかのぼって数時間前。

閃光玉による目つぶしのせいであらぬ方向に攻撃を繰り出しているジンオウガ亜種の唸り声を耳にしつつ、声の主である金髪の女性ハンターのもとへと、俺達は走った。

そしてたどり着くや否や、頭を抑えて茂みに隠される。

「お、おいつ?!」

「シッ!……静かに」

女性ハンターは暴れ回るジンオウガ亜種の様子を見、閃光玉の効果が切れてジンオウガ亜種が匂いで俺達を探そうとしているのを確認する。

すると、なにやらもう2つ手投げ玉を取り出すと、まあまあの距離だというのにジンオウガ亜種の鼻の辺りに命中させてみせる。

片方はどぎついピンク色をしており、その玉の片方は割れるや否や強烈な……えーつと……かぐわしい臭いを放ち、ジンオウガ亜種の嗅覚を麻痺させる。

その臭いを嫌がったのか、獄狼竜はスタコラサツサと森の奥へ逃げていった。

「……よし。もういいわよ」

その言葉を受けて、俺達は茂みから立ち上がる。めっちゃ葉がついたけどそこはいい。

「つ……だああ!!なんなんだ?!なんなんだ!!!」

「落ち着け落ち着け!!」

キレるネーギルガをなだめるために、ポーチの中からハチミツを取り出して口に

シユートする。すると落ち着いたのか、おとなしくハチミツを飲み込んだ。……アオアシラとか思ったのは内緒だ。

女性は呆れたように一つ息を吐く。

「大丈夫？」

「あ、だ、大丈夫です」

「そう、それならよかった。ジンオウガ亜種、やっぱりこんな近辺まで来ていたのね」

「報告を入れなきや」と女性は呟く。ジンオウガ亜種の情報自体はあつたらしい。

「助けてくれてありがとうございます」

「いいの。目の前で死なれちや寝目覚めが悪すぎるわ。どうして森の中に？」

「俺達はウユリ村からユアンシキリの街へ向かう所なんだが、迷ってしまったてな……」

「なるほどね、この森は予めの情報が無ければ迷いやすいものね……いいわよ。私もユアンシキリに行くつもりだし」

聞けば、この女性ハンターは調査の依頼を受けて来ていたらしい。「獄狼竜」が出現したが足取りが掴めないから痕跡を探してほしい」というものだそう、痕跡を見つけて帰還しようとしたところに俺達を見つけたそうだ。

「ありがとうございます。ぜひお願いします。えっと……」

「エルネロツテ。ハンターよ。君たちは、新人？」

「俺はネーギルガ。ヴェルカともどもウユリ村から来た。俺は新人ハンターだが……こいつはハンターじゃないな」

「ヴェルカです。色んなところを見て回るためにもハンターではないです」

「なるほど。ギルドの誓約とかあるものね。ユアンシキリには遠方への交通手段もあるから、どちらにせよ向かうのがいいわ」

そんな感じで、エルネロツテさんにユアンシキリまで送ってもらったのだ。



「一時はどうなるかと思ったけど、何とか無事ね」

「本当にありがとうございます……」

「いいのよ。それより、ネーギルガくんはハンターの本登録だったわよね」

「あ、ああ」

「なら、ついでに連れてってあげる。この街、まあまあ迷いやすいからね」

「本当か！」

「ええ。でも、口調は頑張ってね？」

エルネロツテさんの申し出に、ネーギルガが食いつく。敬語がなっていないのを指摘さ

れて「うっ……」となっているが、頑張ってみる様子だ。

「んじゃあ、此処でお別れになるかな」

「だな。なら、またどこかで会うまで……」

「ああ」

「またな！」

そう言っつて、俺は雑貨屋の方へ、ネーギルガとエルネロツテさんはギルドの方へ。

さて、何処へ向かおうか。まずは閃光玉とか護身用のアイテムを買っていくか――

――とか言っつて別れたはずなのだが。

「お前もこの竜車かよ?!」

「いやー、これには驚きね……」

南の方に向かおうかなと思っつて乗った竜車に、なんと別れたはずのネーギルガとエルネロツテさんも乗っていた。

いやビックリした。まあ確かに、南側には雪原がある。そこにはクリスタル系の素材

がある聞いてるが、目的はその辺りだろうか。

「あー、あんな別れ方したのがこっ恥ずかしくなってきた……」

「俺もだよ……」

「まあ、そんなこともあるわね」

聞いてみれば、エルネロツテさんに勧められ、雪原での小型モンスター討伐依頼に、素材あつめがてら行くことにしたのだとか。

エルネロツテさんもエルネロツテさんで、雪原への調査依頼のために雪原へ向かうとのこと。

そういえば、雪の森で助けてもらった時も調査依頼だったとか言っていたっけ。

そう思っていたのが口に出ていたのか。

「情報は大切よ。それは旅先でも、モンスターでも変わらない。狩猟するにも、相手のことをしっかり調べないと、防げるものも防げないわ」

「なるほどな。俺達は雪の森に獄狼竜がいることを知らなかった……だから、何も対策できず、エルネロツテ先輩がいなかったら……」

「ふふっ、そういうことかもね」

エルネロツテさんは、眼鏡を拭きつつ笑った。ミステリアスな印象だ。

「そーいや、ヴェルカはどこに向かっているんだ？」

「俺は、とりあえず南の方に行こうかなって。そこの村経由で、次の目的地でも探そうかな」

「南……フェルト村ね。どのみち雪原を経由するからこの竜車に乗っていたのね」
「そういうことです」

ガタゴトと竜車が揺れる。先導する車を引くポポがかわいいなあと思いつつ雑談しているうちに時間は過ぎていった。

四枚目・雪原を進む

雪原の拠点にたどり着き、童車が止まる。ここから先は、地形の関係上少し歩かなければならないのだそうだ。

荷物を持って童車を降りる。今回はきちんと、雑貨屋で売っていた(売ってくれた)閃光玉と音爆弾を持ってきている。流石にこやし玉は売ってなかった。そりやそうだな。

「さて、改めてここで一旦お別れになるわね」

「そうですね。フェルト村は南で……」

「狩場は西だからな。と言っても」

また会いそうなんだよなあ……というのは、この場に居る3人全員同じだろう。狩場の一部を通るし。

「ま、その時はその時ね」

「だな……です。じゃあ、まあ……また会おう、だな」

「ああ」

そう、2度目の別れの言葉を言い合って二人と別れた。

別れ際、エルネロツテさんが「あつ」と言つて振り返つた。

「道次第だけど、崖崩れが起きやすくなっているわ。くれぐれも落ちないようにね」



雪原を進む。別段ギアノスに襲撃されるとかはなく、今のところ平和だ。

今向かっているフェルト村は、雪原を下つたところにある。規模はユアンシキリやドンドルマのような街程大きくはないが、ウユリ村よりもはるかに大きいらしい。イメージとしては、「陸のジャンボ村」のような感じだ。話に聞くにはあそこまで大きく発展しているようではないが。

今進んでいるのはポツポツ針葉樹が生えているだけのただっ広い雪原だ。いやまあ、そもそもここは「雪原」なんだけどね。

「ポポとケルビはどこにでもいるな……」

ふわふわした子ポポを視界の端に更に進んでいくと、徐々に足元は雪の積もった土から、凍った地面に変わってきた。

ガムートの毛織物のコートを着ているため寒くはないが、滑って転びたくはない。下り坂になってきたし、気を付けるか。

辛うじて生き残っている、雪に埋もれた低木の茂みに脚を踏み入れた時、近くで鳴き声が聞こえた。

『……キユ……』

「ん？」

微かに聞こえる弱弱しい鳴き声。方向は、針葉樹の森の方だ。

針葉樹の森の方は、場所によっては切り立った崖が雪に隠されているため、危険だ。しかし、近くくらいならいいだろう。近くに崖はみえないし。

雪をかき分けて針葉樹の森に踏み入れると、まず飛び込んできたのは赤く染まった雪だ。

嫌な予感がしつつも顔を上げると、衝撃的な光景が目に入った。

「……っ！」

そこには、あまりにも酷すぎる傷を負った“氷牙竜”ベリオロスが、いた。赤い血の源泉は、そのベリオロスだった。

その傍には中身がめちやくちやにされた割れた殻のようなものが散乱している。お

そらく、タマゴだろう。それも孵化前の。

ただ一匹だけ、傷だらけの小さなベリオオスの幼体は、重症のベリオオスの傍で弱々しく、親に縋るように鳴いていた。

「これは……」

周囲を見渡せば、戦闘の跡が見受けられる。凍り付いた木々はおそらくベリオオスのものだろうが、雷などによつて焼けたような痕や、殴りつけられたような痕は間違いない別の何かのものだ。

親ベリオオスの傷はあまりにも深く手遅れだが、子ベリオオスはまだ間に合いそう
だ。

とにかく見つけてしまった以上、ほおっておくわけにはいかない。昔、俺が……イ
ヴェルカーナが住んでいた地の近くに同種が住んでいたよしみだ。

鞆の中から薬草を取り出す。回復薬はヒト用に加工されたものだから、下手にモンス
ターに与えられない。

一歩近づこうとすると、親ベリオオスは重傷だというのに俺の方を見て、首を少し起
こして低く唸った。そりゃ、警戒するだろう。

しかし、このままでは親ベリオオスだけでなく子ベリオオスも死んでしまう。

だから、少し奥の手だ。

少し目を伏せ、それから、親ベリオロスを睨みつける。流石のベリオロスといえど、「敵意はない、動くな」という意味を込められて古イヴェルカーナ龍の眼に睨まれれば下手に動けないだろう。

龍の眼になった目をもう一度伏せると、人のモノに戻る……戻ってるよね？

あのポンコツ白トカゲトルに言われたのだが、いくらか氷龍の特性を受け継いでいるらしい。さっきの眼とかだ。頑張れば規模が小さいブレスも吐けなくはないし、滅茶苦茶頑張れば氷龍の姿になれる（らしい）が、曰く「下手すりや命削るから奥の手だよ??？」と言われている。

モンスターという言葉を理解することもできるが、話すことはできない。それっぽい鳴き真似はできるが声帯が違う。どこのジンオウガ教官みたいに上手くはないし。

子ベリオロスに、薬草を使う。できる限りベタベタ触らないようにしつつ手当を施す。

体温がかなり下がっていたので、（無添加）ホットドリンクをできる限り薄めたものに薬草を混ぜ、飲ませる。

「二口でいい。頑張れ！」

子ベリオロスはなんとか一口飲みこむ。それで少しずつ体温が安定してきたのか、呼

吸が整ってくる。

親ベリオロスはそこまでの様子を静かに見守っていた。子ベリオロスの容態が落ちて着いてきたのを見て、警戒を緩めてくれたのだろう。

「よし、次はお前だな」

手遅れかもしれないが、するだけしなないと思ひ、親ベリオロスの手当ても始めようとした時だ。

頭上を、黄金色の光線がかすめた。

親ベリオロスが、俺の背後に向けて弱々しく唸る。

背後を見れば、黒く大きなゴリラがそこにいた。頭部に角を携えたそのゴリラは……金獅子” ラージャンは、気光砲を放った後なのか、口元にほんのり煙を持っていた。

そうか、この傷跡の主がラージャンならつじつまが合う！なるほど、このベリオロスはラージャンに襲われたのか。これまた厄介な！

ラージャンはおそらく、睨みつけた程度では退いてくれないだろう。だってラージャンだもの。

『グォゴゴゴ！』

ラージヤンは大音量の咆哮を放ちながら黄金に輝く。

かと思えば、大跳躍。狙いは俺達纏めてだろう。回避するにはあまりにも速すぎる。

回避なんてできるわけなく、振動に脚をとられて尻もちをつく。

エイムがブレブレだったおかげで直撃こそ免れたが、どっちにしるピンチだ。

着地したラージヤンはこちらに振り向く。せめてどうにかできないかとライトボウ

ガンもどきに装填して撃ってみるが、硬すぎて抜けない。

唸り声をあげながら、ラージヤンは再び跳躍しようと、雪の地面を踏みしめる。

今度こそダメだ。奥の手を……と思った瞬間。

「……………」

地面が揺れる。ベリオロスも、ラージヤンも困惑している様子を見せる。

真つ先に我に返ったラージヤンが、今がチャンスと拳を地面に叩きつける。

それがトドメとなったのか、地面が崩れ始める。

「おわあああ?!」

白い地面は俺もベリオロス親子もラージヤンも？み込み、下へと崩れていった。

五枚目・零下の白騎士

雪に吞まれ、落下する。そういえばエルネロツテさんが言っていたっけ、「崖崩れが起きやすくなっている」と。

なるほど、此処は針葉樹の森の中でも崖に近い場所だったのが、雪が積もって崖に見えるなくなっていたのか。それが、ラージャンの行動がトドメになって崩れた、というあたりか。

視界が白に吞み込まれる中、胸元に何かふわりとしたものが飛び込んでくる。俺はそれを、反射的に抱きとめながら落下していく。

「ツグー！」

数秒して、背中に衝撃が走る。身構えようにも共に落ちる雪に阻まれていたので無理だ。

衝撃の後、すぐにどさどさどさどさと雪塊が積もる。抱えたふわふわを守るような体勢。口の中に雪が入らないよう、口を閉じて。

すぐにどさどさとは聞こえなくなったが、覆いかぶさる雪が重くなっていくあたり、かなりの量なのだろう。息がしにくい。

段々と意識が朦朧としはじめてきた。ヤバい――

『グォルルルルル!』

轟音と衝撃で意識が覚醒する。気がつけば、体が空中に投げ出されていた。

「?!」

雪に埋もれたラージヤンが、勢いよく飛び出した。そばに埋もれていたからか、その時に一緒に跳ね飛ばされたようだ。

そのまま、再び雪の地面に叩きつけられる。が、今度は雪が覆いかぶさったりはしてこない。

全身が痛い、ふわふわを抱きかかえたまま無理矢理体を起こす。

『キユ……』

抱えた物体から鳴き声が出て見れば、ベリオロスの子供だった。あの手当をした子だ。縫うような眼でこちらを見ている。

ラージヤンの方を見れば、崖崩れで落ちたのが瘤に障ったのだろう。イラついた目でこちらを見ている。おおかた、俺達が原因とでもおもっているところか。八つ当たりやめてください。

手元にライトボウガンもどきはあるが、手持ちの弾は効かない。閃光玉で目くらまししたいが、手元に荷物が無い。落ちるときに飛ばされたのか、ラージャンの向こう側に荷物が見える。あれでは取りに行けない。

ラージャンは拳を振り上げながら息を吸い込む。気光砲の前動作だ。

おそらく避けきれない。切り札を切るべきか？ いや、まだか？ と、悩んで反応が遅くなっているうちに、ラージャンは量の腕を地面についでいた。

避けることはできず、エネルギーの波が俺達を襲う――

――ことはなかった。

代わりに頬を撫でる冷気。

不思議に思っ、反射的に瞑っていた目を開けば、俺達とラージャンの間に割って入るように傷だらけの白い影が……親ベリオロスが、いた。

ラージャンの攻撃が中断させられたのは、親ベリオロスの放った冷気をつむじ風が命中したからだ。

『グ、クルルルル……』

「お前……！」

牙はひびが入り、棘は半数折れ、体中についた傷から血を流しながらも、しっかりとラージャンを睨みつけている。

ラージャンは割って入って邪魔をして来たベリオオスを睨み、唸りながら睨み返す。

かと思えば、突然ラージャンは跳躍し、ベリオオスへ向けて空中から飛び込みを仕掛けた。

若干鈍いながらも、ベリオオスは的確にラージャンへとプレスを命中させる。

左脚を凍らされたラージャンは、空中にいらつというのに無理矢理体勢を立て直し、ベリオオスに向けて雷電を纏って飛び込む。

既にボロボロのベリオオスは避けきることが出来ず、モロにダイブをくらう。

しかし、それでもなおベリオオスはラージャンに一矢報いて撃退しようとして、その琥珀の牙を突き立てる。

鮮血が飛び散る。ラージャンの剛毛と言えど、牙のように一点に力を込められれば貫通する。

ラージャンはベリオオスを剥がそうとベリオオスの首根っこを掴むが、その体のどこに力が残っているのか、ベリオオスは食らいつき続ける。

呆然と見ていたが、ふと今なら……と思い立ち、俺は子ペリオロスを抱えたまま鞆の方へと走った。

そして、鞆の中から閃光玉を探り出す。

その瞬間、「ボキッ」という音が響いた。見れば、ペリオロスが中空に投げ出されていた。牙が無くなっており、折れた牙はラージャンの腕に深深と刺さったままになっている。

どさり、と雪の上に叩きつけられたペリオロスから、白い雪の上に赤い血が広がっていく。ラージャンはそこに追撃をしようと腕を振り上げた。

「っ、せいー！」

ラージャンの顔面の前で、投げた閃光玉が破裂する。強烈な光が周囲を包む。真っ白い雪にも反射して、光の強さは普段よりも強く襲いかかる。

俺は咄嗟に目を瞑り、子ペリオロスの目を塞ぐ。それでもなお、瞼の上から刺すような光が襲いかかる。

そしてしばらくして、光が止んで目を開ける。

光に眩んでクラクラしたラージヤンは、驚いてその場で地面を殴りつけている。

その間に、慌てて親ベリオロスの方へと駆け寄る。

親ベリオロスに近づくなり、すぐに子ベリオロスは腕の中からするりと抜け出した。

『キュ〜……キュ〜!!』

『クルルル………』

親ベリオロスは風前の灯火どころか、残り火しかないような状態だ。

子ベリオロスもそれが分かっているのか、それでも親が死ぬのは嫌なのか、必死で傷を舐める。

親ベリオロスは穏やかな眼差しで子ベリオロスを見つめると、優しく子ベリオロスを

毛繕いした。

「……………」

親の死に目に会える子は少ない。それは、人間もモンスターも変わらず。

むしろモンスターなら、親に殺されかねない事もある。電竜などがその好例だろう。

しかし、このベリオロス親子はまだ幸せな方だ。死ぬ間際に、何やら話せたのだから。

しばらく親子が話しているのを見ていれば、子ベリオロスが『キユ』とひとつ力強く頷き、こちらへと飛び込んできた。

「うわつとと?!」

どういふことかと親ベリオロスを見れば、「任せた」とでも言わんばかりの小さな鳴き声を発した。

断るなんて野暮なことは出来ない。こればかりは仕方ない。

「分かったよ。任せてくれ」

ならば、まだラージャンが混乱している間にこの場を離れなければ。

荷物と子ベリオロスをしつかりと抱え、ラージャンの脇を抜けて走り出した。

しかし、その瞬間目くらましが解けたラージャンが、怒り狂った様子でこちらへ突撃してきた。

ヤバい、と思ったものの衝撃は来ることがなかった。来たのは頬を撫でる冷風だ。

親ベリオロスが、最後の力を振り絞ってブレスをぶつけたのだ。その執念にビビったのか、左半身を凍らせたラージャンはどこかへと逃げて行った。

「……………ありがとう」

親ベリオロスが目を閉じたのを見送り、フェルト村へと足を進めた。

六枚目・立つ鳥達の村

ラージャンンのことや親ベリオロスのこと、ハンターズギルドにでも情報共有しておくかと考えながら、雪道を進む。今度はちゃんと、崖とかには気をつけて進んでいる。

「落ちて迷子になるなよ、ジュハク」

『クユ……』

頭に乗っかる、『ジュハク』と名付けた子ベリオロスにそう言う。名前は「氷刃佩くベリオロス」から、「氷刃佩く」をもじったものと樹氷をかけたものだ。ヒヨウガにしようとしたが、そういうやM H S Tに出てくる金髪の少女が連れていたベリオロスがそんな名前だった気がしてやめた。

ジュハクのサイズは幼体なのもあって頭に乗る。最初は抱えて歩いていたのだが、荷物を整理するのにいちど頭に乗せてみたら、なんとなくその形でおさまってしまった。棘がちよつと痛いのはもう諦めた。

と、やつと見えてきたフェルト村。開けた場所に作られた村であり、飛行船や竜車、雪上船が行き交っているのがこの位置からでも見え、飛行船に混じって数匹の飛竜が飛ん

でいるのも見える。ライダーでもいるのだろうか。

本来ならもつと坂や崖を下りてで時間がかかったはずなのだが、がけ崩れに巻き込まれたからこんなに早く着いたのだ。ある意味ではあのラージャンに感謝か。まあ、それはそれこれこれで報告はちゃんとするけどね。

目の前の崖だけを迂回して下っていけば、フェルト村の入口へとたどり着く。

ウユリ村やユアンシキリの街のように雪が積もっているが、2つの村街とは違い、雪がある程度掻き分けられたりしてあって、歩いたりするのにとても楽。ただ、寒いのは変わらない。ガムートの毛織物コート様々だ。

「まずは宿の確保とラージャンの報告だな」

『むくゆ……』

とりあえず見渡してみると、目に入るのは荷物を運ぶ人々やポポ。陸のジャンボ村というような辺り、交易も盛んなのだろう。箱の中身をちらりと見たら、(多分)モスジャーキーや、(おそらく)何かしらのモンスターのアーマーや欠片が入っていた。多分色合いと見た目的にグラビモスとかバサルモスなんじゃないかな、あれ。

ただ建物の形がだいたいみんな同じなせいで、どこが宿でどこがハンターズギルドなのか分からない。なんで赤い屋根ばっかなんだ。進んでも進んでも赤い屋根。せめ

て色変えて欲しかった。

そして現在、ここ何処状態。ぶっちゃけ迷子だ。どこここ。

周囲を見渡せど、どうも人気は少ない。多分住宅街な気がするが、ここからの戻る道順が分からない。

「俺、方向音痴なのかな……」

『?』

ジュハクをもふつと撫でて落ち着く。ベリオロスの幼体はどうしてここまでもふもふなのだろうか。

しかし、どうしようか。ウユリ村ならまだしも、フェルト村は初めて来る。初見マップで地図無しみたいなのはしょーじき苦手である。

と、困っているところにひとつ鳴き声が響いた。

『クオオオオオオ！クオオオオオオ！』

振り向けば、紫の体色に襟巻蜥蜴のような襟を持った鳥竜……”狗竜”ドスジャギイがそこにいた。

モンスターの襲撃か?!と思つてライトボウガンもどきを構えようとしたが、ドスジャ

ギイの背に鞍があるのが目に入り、ライトボウガンもどきを構えるのをやめた。

「チーフ? どうしたの……ん?」

ジャギイ装備の黒髪の少女が、ドスジャギイの元へと駆けてきた。ドスジャギイのことを「チーフ」と呼ぶ彼女は、俺達に気がついてとたたと来た。

「こんにちは! こんな所でどうしたの? 散歩?」

「ど、どうも。あー……いや、散歩というか迷子、ですね。ここ何処なんですか?」

そう尋ねてみると、少女は目を見開いてから。

「ここはフェルト村だけど?」

と答えた。違う、そうじゃない。そういう意味じゃない。そう思ったのはドスジャギイ……チーフ(?) も同じらしく、なんとも言えない微妙な表情をしている。

「もう少し範囲を絞って貰えれば……えっと、宿かハンターズギルドに行きたいんですよ」

「そういうことなら、ここからならハンターズギルドが近いし案内するよ?」

その提案はありがたい。断る理由は特にない。

「お願いします」

「任せて! わたしはヤシロ。こっちはオトモンのチーフ!」

「俺はヴェルカ。この子はベリオロスのジユハクです」

チーフさんに若干先導されつつ進み出すヤシロさんに、俺達もついていく。ハンターズギルドで宿とかの場所も聞くかあ、なんて呑気に進んでいく。

——数十分後。

そして、俺達はめっちゃ迷子になっていた。